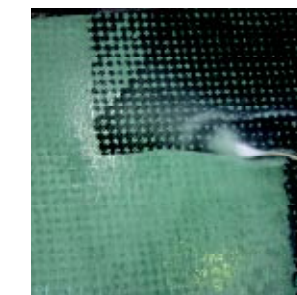


🇫🇮 ランドスケープの可能性を広げる
グラフィックコンクリート



舗装の一部に使用された例。
グラフィカルな道は歩く人に楽しみを与える



グラフィックコンクリート：サムリ・ナーマンカが特許を所有するコンクリート表面加工技術。染色も可能なセメントと砂利を素材に、特殊なインクで印刷したフィルムを用い、セメントと砂利の質感、色味の違いによってデザインを表現する「コンクリート面にデザインを印刷する技術」。低コストで量産できる上、高い耐久性を持つ。フィルムでコンクリートに印刷をし、水で余分なインクを洗い流すと模様浮かび上がる。

集合住宅建築の壁の一部にグラフィックコンクリートが用いられたプロジェクト。複数棟建ち並ぶ敷地において、グラフィックコンクリートに描かれた別々の絵が各棟のアクセントとなっている



メモリアルアートとして古い写真を転写したコンクリート。地域の歴史背景を空間演出に用いている

文 = LANDSCAPE DESIGN 写真 = サムリ・ナーマンカ
Text = LANDSCAPE DESIGN Photography = Samli Naamanka

プロダクト、インテリア、建築、ランドスケープといった多岐にわたる分野で活躍するフィンランド人デザイナーのサムリ・ナーマンカ。この秋、デザインイベントで盛り上がる東京のリビングセンター OZONE (新宿) にて10月30日～11月3日までの5日間、彼の展示会が開催された。その会場でサムリ・ナーマンカにインタビューし、フィンランドにおけるランドスケープデザインの現状や、彼が生み出したグラフィックコンクリートについて話を聞いた。

フィンランドと日本はデザインや教育、福祉などさまざまな比較されることが多い。それは文化面や国民性に共通する面があるからだろう。中でも機能美を追求した無駄のないデザインは、世界中で愛されている。日本でも、アルヴァ・アアルトをはじめとするフィンランドのインテリア

デザイナーや建築家は有名である。このたびインタビューしたサムリ・ナーマンカも現在フィンランドで最も注目されるインテリアデザイナーだ。しかし、彼の活躍は何も内装のデザインだけにとどまらない。食器や家具、インテリアからランドスケープまでと、幅の広いデザイン活動を行うことが特徴だ。こうしたスケールの違う対象を広く扱うデザイナーは日本では珍しい。そんな彼に、まずデザインの対象となる領域について聞いた。

「19993年から7年間、私はフィンランド芸術デザイン大学で家具インテリアデザインの学科を専攻しました。そこでは、単に家具だけをデザインするのではなく、その家具が置かれる空間から捉えるよう教育を受けました。実際に、今はプロダクトからランドスケープまでデザインすることがありますが、それはすべて同じ空間

としてつながっており、スケールが違うだけです。何かアイテムをデザインしたときには、それらを並べたとき協調しあうことや、デザインする空間自体をまず理解することを大切にしています」
そうしたスケールの違うデザインを幅広く取り組むサムリには、ランドスケープアーキテクトとしての一面もある。その主な表現方法として用いているのが、彼が編み出したグラフィックコンクリートである。

現代において建築や街をつくる際には欠かすことのできない素材となったコンクリート。そこへ彼は“新しい表情”を加えることでデザインの幅を広げることに成功した。

「グラフィックコンクリートは、コンクリート面にデザインを印刷することのできる技術です。模様によっては施工のつなぎ目を目立たなくすることができます。また壁や構造などと一体化して

デザインを組み込むことができるので、シンプルな構造で空間にアクセントを加えることも。使い次第で無限のデザインが実現できるので」

実際、どんなランドスケープの作品を手がけているのだろうか。

「ヘルシンキの市内の集合住宅の再開発プロジェクトにおける『思い出の軌跡』では、かつてそこで暮らした人々の面影を残すため、住民が持っていた思い出の写真を集め、それをコンクリートにプリントすることでメモリアルアートとして配置しました。その他にも、その土地特有の模様やテクスチャーをコンクリートに織り込むことで、そこにしかない景観を生み出しています」

この技術を多くの建築家やデザイナーにも気軽に使ってもらっていると話すサムリだが、

実際にフィンランドでは国内シェアの2割を獲得しているという。これが日本でも広まり、そこかしこの路面を覆う灰色のコンクリートが、それぞれの土地固有の表情を持ち始めたら…。それはきっと住民にとっても誇りある街の実現に役立つことだろう。

しかし、こうした開発は決してスムーズに展開したわけではなく、「発案から7年間かかった」と苦勞を伺わせるコメントも。

日本ではメーカーとデザイナーの共同開発

は各業界において行われているが、そのほとんどがコンセプト商品や期間限定のもの。技術とデザインの一体化により、よりよい商品が生み出されていくことを期待したい。

最後にサムリに好きな日本のランドスケープは？ と訪ねると、「安藤忠雄氏がデザインした表参道ヒルズ。コンクリートも美しいけれど、ファサードを彩る人の動きを映した映像も見事」と、やはりコンクリート建築の権威、安藤氏の活躍は気になるようだ。



Samuli Naamanka (サムリ・ナーマンカ)

1969年フィンランド、キーミンキ生まれ。大学在学中にインテリアデザイン、グラフィックデザイン、理論物理学の学位を取得。2004年にグラフィック・コンクリートの開発にエレベーション・ビルディング賞受賞。最近では、2008年2月にストックホルム家具見本市においてノルディスカ・デザイン賞を受賞するなど各業界から評価されている。



かつて海に向かってかかっていた栈橋を髣髴させるアートワーク

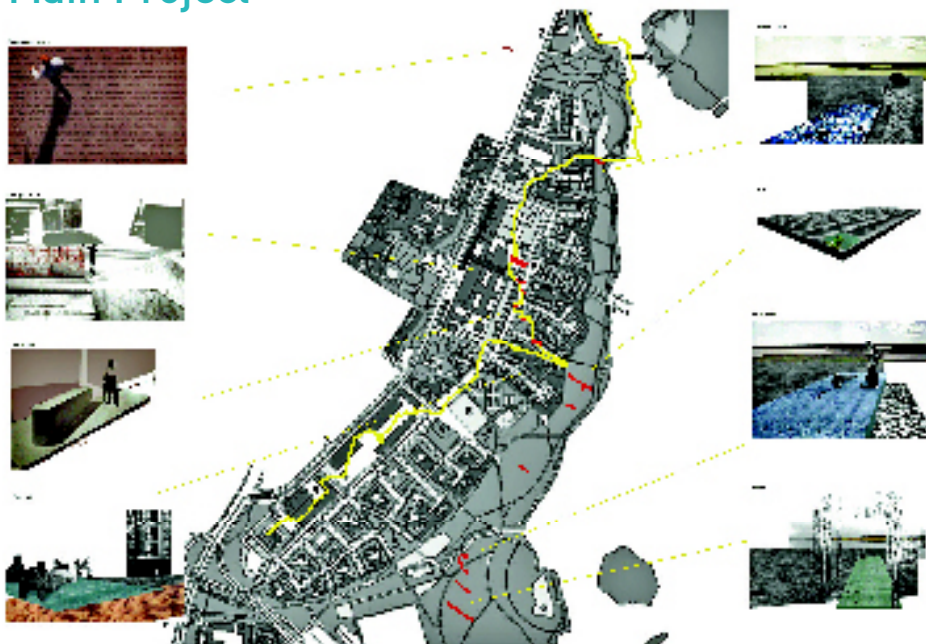


埋め立てにより開発された集合住宅から伸びる新たな栈橋は、ちょっとした休憩スペースとしても利用される



海に近い敷地ということから、グラフィックコンクリートも波や砂浜のパターンを用いた

Main Project



「栈橋」：アラビア海岸 (ヘルシンキ市、2007年)

近年、アラビア海岸の海岸線は継続的に変化し続けており、この作品はその海岸線での変貌を表現している。かつて海岸から海へと突き出していた数本の栈橋をアートワークとして復元した。現地の公園と建築された環境をつなぐ空間として、栈橋がこの土地に眠る歴史を物語る。

左図／黄色の線がかつての海岸線。どれだけ開発が進行しているかが見てとれる。赤い線が栈橋。街の中に点在する栈橋のアートワークが、この土地の記憶を表す一つのシンボルになっている。